

# 会長からの メッセージ

「社会からの謙虚な受信と、社会への積極的な発言」をしていくなかで、「会長の顔が皆に見える学会」にすることは重要であると考え、奇数月号に会長から会員、社会に向けたメッセージを伝えるページとして、「会長からのメッセージ」を掲載する。

土木界が激しく変化しているいま、このページを通じて、われわれの学会の会長が何を考え、どこを目指しているかを知っていただき、各会員が今後の土木界を考えるきっかけとしていただきたい。



## 失敗から学んだこと

土木学会第97代会長

近藤 徹



「馬鹿一ツ、学校でちよつと教  
わつたからつて、わかつた気になる  
んじゃないツ」満座の中で怒鳴ら  
れた。大学を卒業して、ダム工事  
事務所で2ヶ月経つた頃のこと。  
仮排水路トンネルの設計のため、  
水位流量グラフを描いていた。そ  
こへ所長が部屋へ入つてきて、私の  
机上をのぞき込んだ。トンネル水  
路は水深が径以下の場合、開水  
路、径以上になると管水路の流  
量公式で算定する。水位が径付

近で不連続のグラフになった。所  
長は「不連続のところは適当に滑  
らかに書いておけよ」と優しく教  
えてくれた。「適当に」を新人の  
私は「誤魔化して」と受け取つて  
しまつて、生意気にも「理論的に  
は違うんじゃないですか」と反論  
してしまつた。すかさず「馬  
鹿一ツ」が落ちた。技術者人生最  
初の失敗だった。およそ公式には  
適用限界があり、限界付近では  
公式とは違う現象が起こるだろ

うという洞察力を持つてという所  
長の真意だったのかも知れない。  
それを知るまでに、その後多くの  
経験と時間を要した。  
ダム技術者で2年経つた頃、私  
が設計した付替道路の橋梁を受  
注したメーカーから電話がかかっ  
てきた。仮組み検査をしたが、座  
屈の心配があるという。大学で橋  
梁を専攻していた私は、当時プー  
ムになったプレストレスコンクリー  
トと鋼橋の設計を組み合わせて、

プレストレスの鋼橋を設計した。  
所長は「ダムの安全にかかわるこ  
とは、絶対許さないが、それ以外  
の道楽には付き合つてやろう」と  
許可してくれた。メーカー担当者  
は「鋼橋標準示方書は、プレスト  
レスを予定していない基準だか  
ら、最小ウエブ厚や最大スティフ  
ナー間隔の規定は、そのままでは  
不足しているのではないか」と注  
意してくれた。技術の適用限界  
に対する考察力が不足していた  
のだ。そもそも圧縮荷重に強いコ  
ンクリート材の理論を、引張荷重  
に強い鉄材に応用しようとした  
のだから、技術の基礎が根本的に  
間違つていたのだ。未熟者の生兵  
法が犯した大失敗だった。

学と機械工学とは専門分野は違  
うが、実用に供するにあつて、理  
論式に頼るだけではなく、確実に  
安定的に機能を発揮できるかを  
とことん追及する点では、相通ず  
るものがあるのだらうと思つた。  
工学は、理学が解明した理論  
式をただちに採用するのではな  
く、破壊実験、試運転などで検証  
したり、経験で補強しながら、安  
全率や、余裕を見込んで設計し  
て、はじめて実用に供する。経験  
には、他人には言えないような馬  
鹿馬鹿しい失敗もあるが、失敗  
から学ぶことは多い。新人だから  
何とか見逃してもらえた苦しい失  
敗からも有益な教訓を得た。  
この会長からのメッセージの稿  
は、次世代を担う土木技術者には  
参考に、熟練技術者には共感  
していただければ幸いとして記す  
ことにする。